



会報

会報 第13号
令和3年10月発行

寄稿

「和紙について思うこと」 増田勝彦

最近、和紙といわれて出回っている紙について、考える機会がありました。日本で継承されてきた伝統とはかけ離れた材料・処理方法で造られた紙あるいは繊維集合シートが、和紙風とも呼ばずに和紙という言葉の商品名の頭や後ろに付けて流通されています。和紙という言葉は、商品にそれほど良い印象を与えることが出来る便利な言葉なのです。

ところで、明治以降改良が重ねられていた現代の手漉き和紙技法の中心には、江戸時代の和紙造りの技法が残っているからこそ伝統工芸として評価されているのですが、そのような状況にあつて、数カ所の紙漉きには、すでに忘れ去られた技法が断片的に残っている場合があります。私は紙漉きにおける古式技法と呼んでいるものです。

まず、小判の漉き枠を使っていること。吉井源太が大桁を開発して以来、小判の漉き枠のまま紙

漉きをしている漉き場は少ない。吉野の三栖紙は把手が無い小型の漉き枠で漉きます。



紙漉重宝記 寛政10年1798年

漉いた直後に、紙床に濡れ紙を移すのが普通ですが、名塩(なじお)では、昔からの間似合(まにあい)判寸法で漉いて二枚の簀を交互に使い、一枚分は

斜めに立て掛けて雫を落としています。複数の漉簀(すきす)を使っている様子は古い紙漉き図で見ることが出来ます。漉き上げた漉簀を立て掛けて十分に雫を落としている間に別の簀で漉く技法は、高野紙で行われています。

名塩間似合紙は完全な溜漉きで、極めて小さく揺するだけです。その揺らし方はまるでフランスで見た紙漉きと同じです。



止戈枢要 文化11-文政5年1815-22年

馬鍬（マセ）が開発されるまでは単なる棒で攪拌していたらしいのですが、現在も四角い木杵を攪拌に使っている漉き場もあります。

我が国では、古い技術を色濃く残す和紙も、伝統から殆ど離れてしまった和紙？も、人々に受け入れられている現状では、市場経済に巻き込まれる事無く、京都の老舗のように限定した顧客を相手に、いわば本物の手漉き和紙の流通が出来たら、その方が長く伝統を引き継ぐことができるのではないかと思います。

● 筆者プロフィール

大学卒業後表具師として歴史的絵画・文書の修復に携わる。その後、昭和女子大学教授として、文化財とは何かを学生たちに伝えるかたわら和紙の技術的展開についての研究を続ける。退職後も駿河半紙技術研究会副会長、和紙文化研究会副会長として精力的に講演を行っている。



令和二年度 記念講演会開催

昨年十一月、駿河半紙技術研究会の総会内において、関出（せきいずる）氏による記念講演会が開催されました。演題は「日本美術における手漉き和紙の関わり方」で、絵画表現の基底素材として「〜」でした。関氏は東京藝術大学名誉教授であり当会会員でもあります。

和紙を使用して絵画表現を行うときに使われる物（絵具・墨・道具など）について、その特性や製造方法まで写真を交えて、詳しくご説明頂きました。



関氏より提供頂いた参考書（3冊）

駿河半紙技術研究会主催

令和3年度

総会・記念講演会・懇親会のお知らせ

会期 令和3年11月20日（土）11:00~13:00

会場 富士宮市矢立町737 和風料理「花月」

TEL 0544-23-4141

<http://shizuoka.j47.jp/kagetsu/>

会費 1名 2,000円（税込み）

内容 11:00~11:10 総会

11:10~12:00 記念講演会

講師 古川正儀氏（株）フルコマ代表取締役社長 京都市在住 当会員

仮演題「古川正儀の世界」

12:00~13:00 懇親会 美味しい和食を。

申し込み締切日 10月20日（水）

申し込み方法 前金制 郵便振替ご利用 00830-7-137

柚野手すき和紙工房・内藤恒雄

★★ 2021年度の年会費1,000円のご入金も忘れずにお願い致します ★★

振込先：郵便振替ご利用 00830-7-137

柚野手すき和紙工房・内藤恒雄

〒419-0301 富士宮市上柚野907-1 TEL&FAX 0544-66-0738

